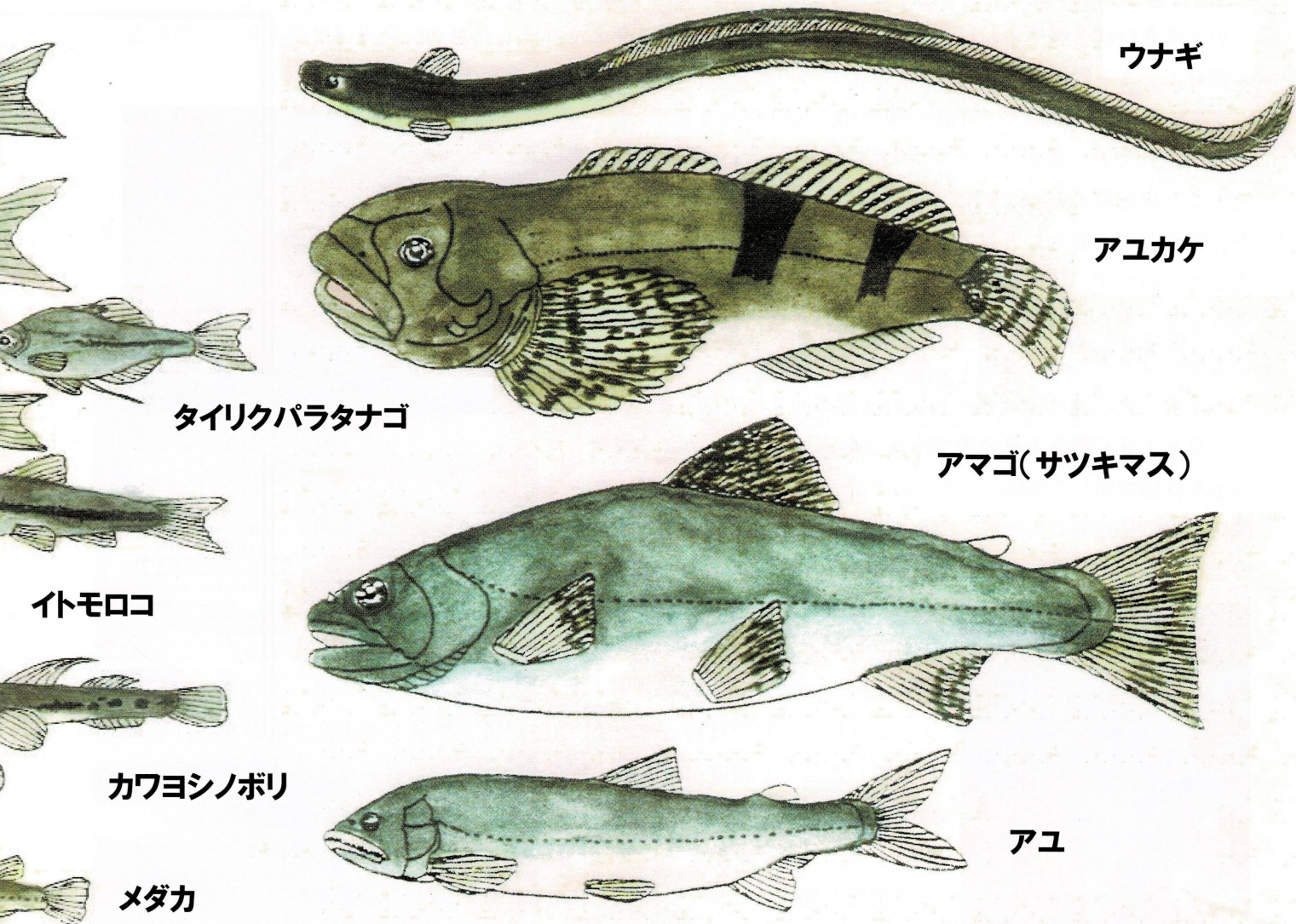


news

長良川市民学習会ニュース

2023 迎春

よみがえれ長良川！



ウナギ

アユカケ

アマゴ(サツキマス)

アユ

タイリクパラタナゴ

イトモロコ

カワヨシノボリ

メダカ

巻頭言 粕谷志郎	1
情勢と活動報告 武藤仁	2
●愛知県長良川河口堰最適運用検討委員会の12年とこれから 伊藤達也	4
設楽ダム建設ストップ!の歩みは止めません 奥宮芳子	8
長良川・伊勢湾をめぐる新聞「論調」に危惧 堀敏弘	10
●パネル展「よみがえれ長良川 2022」報告と2023年展企画	12
メディコスまつりで「ブース」出展しました	15
●長良川の魚をこよなく愛した宮子さん 田中万寿	17
宮子先生と私 村瀬 文好	18
後藤宮子さんと私 川那部 浩哉	19
追悼 須田道康(ギンプナの会)さん / 事務局から	20
団体紹介 水源連 遠藤保男	22

No.38

2023年1月31日

新年明けましておめでとうございます。

長良川市民学習会代表 粕谷志郎

引き続き疫病と戦争の時代、エネルギー、食糧の危機迫る年となりましたが、長良川市民学習会の活動を支え続けて下さる皆様に、年頭に当たり心からの敬意と、感謝の気持ちを表したいと思います。

さて、私は、年明けから中津川市の川上川（かわうえがわ）上流を訪れております。カモシカの幼獣とも出会いました。また、これほど澄んだ水を見るのは初めての経験でした。ところが、表現しようがないとはこの事でしょうか。透明な水は目に入らないのです。川底の明るい褐色の透き通るような岩が目に入ります。岩に反射した光はゆらゆら揺れて目に届きます。水の表面には木漏れ日が反射し、流れでかく乱されキラキラ輝いています。沢の流れの「ざー」という音が回りに充満しています。息を大きく吸うと鼻の奥で冷たさを感じますが、どこまで吸っても臭いらしきものを感じません。見えない水を五感で感じる経験でした。行き先は奥三界岳でしたが、途中で帰途につき、再びこの沢を目指しました。微かに沢の音が聞こえ始め、だんだんと大きくなってゆきます。「お帰りなさい」と大声で迎えてくれるかのようでした。今日も山川から生きるエネルギーをもらって帰ります。



目には映らない実体は他にも沢山あります。今猛威を振るっている新型コロナもその一つです。今までパンデミックを数えきれないほど乗り越えてきた人類ですが、PCR法によってリアルタイムに病原体の変異を追いかけることができるようになったのは初めてです。XBB.1.5がアメリカ東部で広がり、日本にも上陸した云々と報道があると、またかの思いですが、今アメリカ合衆国での感染者数は極めて少数です。今や日本だけがダントツ世界一の感染者数を誇っています。アメリカやヨーロッパ、韓国もちょうど1年前、コロナに対する社会的規制を撤廃しております。それに伴い驚くほどの患者数が記録されたことは事実です。しかし、その後はごく少数で推移してきました。日本はずいぶん遅れて緩和（撤廃ではない）しており、その後大きな波が3波続いています。中国はもっと遅れて撤廃ですので、これからがすごい波になるのではないのでしょうか。パンデミックはほぼ去り、エンデミック（地方流行）へと移行したと考えて良いと思います。しかし、感染を抑える力は、残念ながら感染によって獲得された集団免疫に勝るものはなさそうです。その新型コロナウイルスですが、厚生労働省の会議で確認されたことによりますと、死亡率は季節性インフルエンザのそれを下回ってきました。多少の強弱はあるものの、弱毒化の流れに逆らうことはなさそうです。現在、風邪コロナウイルスは4種類確認されています。この中にはかつてパンデミックを引き起こしたと推定されるものもあり、新型コロナウイルスも5番目の風邪コロナへの道をたどると思われます。

今年が皆様にとって良い年となりますよう。私たち、長良川市民学習会の活動が障害なく遂行できることを願っています。改めて活動への参加、ご支援をお願いします。

情勢と活動報告

長良川市民学習会事務局 局長 武藤 仁

前号（37号）発行の6月27日以降の情勢と活動報告をします。

発行直後の7月10日に総選挙がありました。与党の「勝利」で河口堰開門、導水路事業の中止などを求める私たちにとってはさらに厳しい情勢となりました。岸田政権は支持率を低下させる中、国民の声・国会を蔑ろにし「閣議決定」で防衛費の倍増、原発回帰・・・危険な道をつ走り始めました。

収束が見えないウクライナ戦争、コロナ禍、頻発する自然災害で、市民の気持ちは内向きとなり、暗くなりだんだん荒んでいくようで心配です。そうした中、私たちは「長良川のいま」「身のまわりの命のこと」をもっとよく見てほしい、考えてほしい、という思いで7月にパネル展「よみがえれ長良川2022」の開催、10月に「メディアコスまつり」のブース出展に取り組みました。多くの市民・子どもたちと出会い「長良川のこと、魚のこと」を語り合うことができました。本ニュースP12～P16をご覧ください。

「国土強靱化」工事で変貌する長良川



千鳥橋下流側の河原を見る 2022/11/12



千鳥橋上流側の河原を見る



約15兆円規模で進められていますが、財政のタガが外れている政府のもとでは、暴走が心配されます。「いのちを守る」を看板に、生態系や景観を無視した事業は、現場でチェックしなければなりません。

今、長良川の各地で**国土強靱化対策工事(5か年加速化対策)**の看板(左上写真)を掲げて大々的に河川工事が行われています。「いったい何の工事をやってるの!?長良川はどうなっちゃうの?」と心配する声が当会にもたくさん寄せられています。

「いのちとくらしをまもる」ために洪水対策として河原の樹木を伐採し岸辺の土砂を掘削し、流れやすい水路のような断面にしようとするものです。

岐阜市長良古津の千鳥橋下流側の河原の岸辺は、昨年ついにすり鉢状になってしまいました。いい水遊びの場だったのに、もう子どもは危なくて川に近づくこともできません(左中写真)。今年度からは千鳥橋上流側の河原の剥ぎ取り工事が本格的に始まりました。まぶしいばかりの真っ白な玉石が広がっていた広大な河原は、砂漠に一変!まさか!洪水対策とはいえ、ここまでやるとは思ってもみませんでした(左下写真)。

洪水被害が頻発するきょうこの頃、「いのち」を守るための工事と言われれば、声が出にくい世間の雰囲気の中で・・・

水辺や河畔林に棲んでいた「小さい命」はどこへ行くのだろうか?土砂が被る川底で鵜飼のアユは産卵し生きていけるのだろうか?ちょっと立ち止まって考えたいです。「今でも水泳ができる美しい川なんだよ!」と誇った長良川っ子の行動の正念場です。

国土強靱化法は、東日本大震災の教訓に事前防災・減災、復旧復興の計画的実施、国際競争力の向上などを謳い2013年成立・施行されました。5か年加速化計画は2021年度より

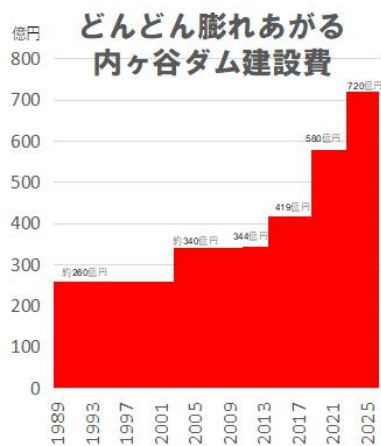


美濃市 板取川合流点下流付近

建設費増額が止まらない内ヶ谷ダム建設事業

10月12日に開催された岐阜県事業評価監視委員会報告によれば、内ヶ谷ダム事業費が150億円増額されて730億円に！工期も延長。どんどんどどん工事費は増えていきます。

増額の理由は、一昨年の豪雨などで地下水位が上がり、左岸斜面がずれ下がり始めたのでその対策のためなどのこと。ちょっと考えられないようなずさんな建設計画・設計にびっくりです（下図を、ご覧ください）。3年前の増額理由は「予想外の地盤の亀裂対策」だったのに！もう「予想外」はいい加減にしてほしいです。もう一つの理由は人件費の増加。設楽ダム工事費増額で使われた「働き方改革」？理由は何でもあり！



岐阜県内ヶ谷ダム ホームページ「工事進捗状況」（令和4年11月末現在）に加筆

横越「遊水地」問題で活発な議論

新聞報道（右図）によれば9月29日「第2回長良川遊水地河川環境調査検討会」が開催され活発な議論がなされたようです（開催告知がいつも直前なので一般市民は傍聴できない）。記事によれば森誠一（岐阜協立大教授）検討委員は、「しっかりと検討して見直すべきだ」とくぎを刺されたようです。今後、検討会は横越遊水地工事による水害の危険や環境悪化を指摘する横越「遊水地」問題学習会など地元の声をよく聴き運営を進めてほしいです。

徳山ダム導水路事業をめぐる動き

徳山ダム導水（木曽川水系連絡導水路）事業をめぐる動向は、本ニュース35号（2021/10/1）で報告した「令和4年度以降も新たな段階に入らずに環境調査を継続しつつ、引き続きダム事業の検証に係る検討を進めるものとする」（検討会第5回幹事会）のままのよう動きは見えません。事業目的を失ったもとで、リスク論に依拠した事業の

「目的探し」をしているようですが、昨年は「中部地方水供給リスク管理検討会」も開催されませんでした。水面下で、「平6のような大渇水が、あと1か月続いたら」「御岳の大爆発で木曽川の水が使えなくなったら」「洪水対策で事前放流が空振りに終わってダムがカラになったら」・・・次々と「リスク作り」に知恵を絞っているようです。でも、そんな場合じゃないでしょ！少子高齢化が進む中で、老朽化する膨大なインフラ施設をどう管理するのか喫緊の課題でしょ！と言いたいです。

一方、私たちが昨年行った「長良川クイズ」では「導水路問題を全く知らない」と答える市民が7割以上でした。ショックでした。市民の無関心は危ない状況です。私たちは、よみがえれ長良川実行委員会の仲間とともに、事業の中止を求めて市民に分かりやすいリーフレットを、今年発行し議論を広げたいと考えています。

今年は、愛知県知事選挙、統一地方選挙の年です。導水路中止、河口堰開門の声を上げましょう。



2022年9月30日 中日新聞（岐阜県版）

愛知県長良川河口堰最適運用検討委員会の12年とこれから

伊藤達也（法政大学）

1. 大村秀章愛知県知事、河村たかし名古屋市長の公約

私が愛知県長良川河口堰最適運用検討委員会（以下、最適運用委員会）に関わって10年以上がたちます。もしかして皆さんは、この委員会がどのような経緯で設立されたかを忘れてしまったのではないのでしょうか。少し思い返してみましょう。最適運用委員会は長良川河口堰の開門調査を目指して設立されました。2012年6月のことです。

実はその前年の2011年2月に、大村秀章愛知県知事、河村たかし名古屋市長がそれぞれ愛知県知事選、名古屋市長選で、「アイチ・ナゴヤ共同マニフェスト」、環境政策については「『10大環境政策』で環境首都アイチ・ナゴヤを」を掲げて当選しました。表1を見てください。2人が掲げた10大環境政策マニフェストです。これを見ていて、当時、マニフェスト作成にあたり、私も意見を聞かれたのでいくつか提案したことを思い出しました。今でも色あせることのない、とても素敵なマニフェストだと思いませんか。問題は10数年が経ち、これらがどれだけ実現したかということです。ここで2人の政治家の政策実現能力のなさを批判するつもりはありませんが、環境面についてはもっと頑張してほしいと正直に思う次第です。部分的にでもどれだけ実現したのだろうか？

表1 『10大環境政策』で環境首都アイチ・ナゴヤを

1	藤前干潟を市民とのふれあいのメッカに
2	2010COP10を継承(生物多様性条約締約国会議の成果を活かしたシンポジウムやイベントを開催)
3	木曽川水系連絡導水路事業の見直し
4	長良川河口堰の開門調査
5	世界最先端の自動車環境都市の実現へ
6	自転車環境を整備(都市部での安全な自転車環境整備を促進)
7	バイオマスエネルギーの活用を推進
8	太陽光発電の支援
9	都市緑化の推進(森林、里山の保全に努め、まちの緑化率を高める)
10	河川の自然再生(集水域管理をベースに、河川の自然再生をすすめる事業に取り組む)

資料) 減税ニッポン HP (2021 検索)より引用、一部修正

2. 長良川河口堰検証プロジェクトチームと長良川河口堰検証専門委員会

2011年2月、愛知県知事に当選した大村知事は早速、マニフェスト「10大環境政策」にある「長良川河口堰の開門調査」のための組織を立ち上げました。組織は2階建てで、まず長良川河口堰検証プロジェクトチームが専門的

見地からの知見集約のために設置されました。そして、その下に具体的な検証作業を行う検証専門委員会が設置されました。私はこの検証専門委員会に委員として参加しました。ですので、それから12年間、河口堰開門のための委員会に関わっていることになります。

検証専門委員会は、座長が青山学院大学教授（今は辞めてます）の小島敏郎さんと京都大学名誉教授の今本博健さんで、そのほかに6人が委員に就任しました。検証専門委員会は完全にオープンな形で開催され、傍聴席からの発言もすべて取り上げられました。もちろん、批判も自由で、検証専門委員会に提出されたパブリックコメント等は、私から見れば誹謗中傷の嵐でした（苦笑）。あのパブリックコメントは匿名でいいというルールは変えた方がいいです。でないと、意見表明が感情的になり、参考になりません。会議そのものも傍聴席から発言する国土交通省の役人を含め、なかなか刺激的でした。やはり、自分の名前や顔がさらされる中での発言はおのずと自制され、議論になりえたと思っています。検証専門委員会は2011年7月に召集され、11月7日に取りまとめが行われました。そこで検証専門委員会は『報告書』を完成させ、2012年1月、大村知事に手渡されました。『報告書』は、長良川の環境回復のためには、回遊魚の遡上、降下時期の河口堰開放が必要で、開門時期は、夏季の高水温時、渇水期の浮遊藻類の発生時、貧酸素環境の拡大が深刻となる時期がよい、開門方法は、現状の利水に支障を生じさせず、塩害が発生しないことを前提に行い、調査期間は農業用水の取水が終了する10月11日から翌年3月31日のできるだけ早い時からの開始が望ましく、開門調査期間は5年以上必要と提案されていました。

・ 2011年『報告書』（<https://www.pref.aichi.jp/soshiki/mizushigen/0000048111.html>）

3. 愛知県長良川河口堰最適運用検討委員会と国土交通省

『報告書』で明らかにされた通り、長良川河口堰は環境に多大な影響を与えていることが懸念されました。愛知県はその実態を明らかにするために、国土交通省との間で合同会議を立ち上げるべく、長良川河口堰合同会議準備会を設置して開門調査の実施を迫るとともに、愛知県側の対応組織として最適運用委員会を設置しました。しかし、国土交通省は開門調査の必要性を全く認めず、長良川河口堰合同会議準備会は2度開かれたものの、合同会議の開催合意に至っていません。実は今日に至るまでこのような状況が続いているのです。

目指す開門調査は河口堰運用に伴って発生した環境問題の内容を探るものであり、解決の道を探るために実施するものです。これは木曽三川流域に暮らす人々にとって河口堰の運用開始以来の願いでもあります。国と県は管轄する行政域の大きさは異なれども、どちらも管轄域の行政サービスに責任を有する公的組織です。一方の公的組織が議論を望むのに、もう一方の組織が拒否する理由は民主主義国家にはありません。日本は実は民主主義国家ではなかった？

4. 愛知県長良川河口堰最適運用検討委員会の行ってきたこと

国土交通省との交渉は続けていますが、らちが明かないので、愛知県としてできることを行おうと最適運用委員会は活動を続けています。最適運用委員会は委員・オブザーバー13名で構成され（2022年7月現在）、委員会内

に利水、塩害、環境の3チームが設けられ（途中で流域チームが編成されるものの、現在、すべてのチームが解散）、それぞれが議題を持ち寄って、開門調査に向けての課題を検討してきました。例えば県民への啓もう活動（「清流長良川流域の生き物・生活・産業」連続講座、各種パンフレットの作成など）、チームごとに開門調査に向けての課題の検討（例えば利水チームでは、①水道水の安定供給を確保しつつ行う知多半島の水道水源の切り替え、②福原輪中についての塩害防止に関する調査など）です。

細かく語るときりがないので、ぜひ、委員会の作成したパンフレットを読んでください。専門的にはどれもよくできていると思います、本当に。ただ、これまでも「難しい」、「字が小さい」、「文章が固い」等の批判を受けてきましたので、最新パンフレット『長良川河口堰 これから?』から読んでみてください。このパンフレットはかつてない短さで挿絵も豊富で読みやすくなっているはずです(笑)。まずは『長良川河口堰 これから?』を手にとって、理解が増したら、別のパンフレットを読んでみてください。下記 URL アドレスを入れてクリックするだけで各パンフレットの本文が出てきます。

- ・ 2016 年『166 キロの清流をとり戻すために一まずは長良川河口堰の「プチ開門」を実現しましょうー』42P

(<https://www.pref.aichi.jp/soshiki/mizushigen/0000050209.html>) (図1)

- ・ 2020 年『新しいフルプランへの提案 2030 年 尾張名古屋の新しい水の使い方ー水は賢く使う時代がきた!ー』44P

(<https://www.pref.aichi.jp/soshiki/mizushigen/0000050209.html>) (図2)

- ・ 2022 年『長良川河口堰の現在の課題と最適運用についてー長良川河口堰最適運用検討委員会 10 年の検討の整理と、変化の時代における長良川河口堰の課題と取り組みの方向ー』117P

(<https://www.pref.aichi.jp/uploaded/attachment/412088.pdf>)

- ・ 2022 年『長良川河口堰 これから?』22P

(<https://www.pref.aichi.jp/soshiki/mizushigen/0000050209.html>) (図3)

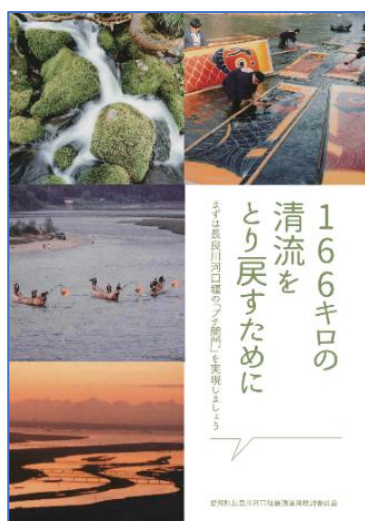


図-1

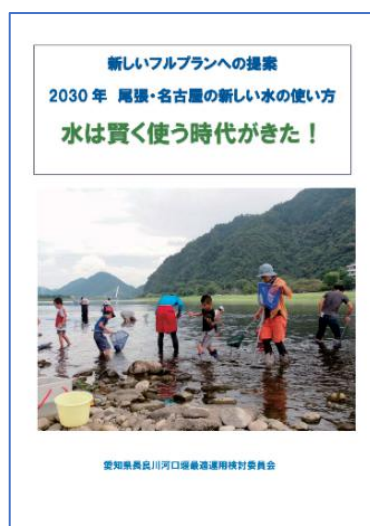


図-2



図-3

5. 現状と課題

先日、熊本県の川辺川ダムに関する「新たな流水型ダムの事業の方向性・進捗を確認する仕組み」第1回会議があり、私もオンラインで視聴しました。「五木の人たちがかわいそうだ。だから早く造れ」、「このダム、すごい贅沢なんですよ。皆さん、ラッキーですよ」など、日本語としておかしい発言が飛び交っていました。五木村の人がかわいそうだと思うなら、ダム計画を止めることです。このダムが贅沢なら、それはダムによる便益よりも費用が大きくて、本来は計画として成り立たないのです。そして、贅沢な費用は間違いなく他地域の治水費用を転用しているのです。そんなこともわからずにはしゃいでいる専門家、自分に来る不利益は許さず、利益だけを得ようとする地元住民代表、造ることを前提に取り仕切る県の役人を見ていて、国交省だけが問題ではないんだ、地方自治体も大学の先生も、そして地元の有力者もみんな、60年間被害を受け続けている五木村の人たちのことが全く念頭にないまま、ただ、川辺川ダムが欲しいんだと思いました。

大村知事は今も長良川河口堰の開門調査を支持してくれていると信じています（個人的には一度ははっきりと確認したいんですがチャンスがありません）。その上で、問題はそれを知事の個人的な思いで終わらせるのではなく、県民の願いとして、そして東海三県県民の願いとしてより強く集約することです。私は時々開門検討委員会の中で、「ここからは大村知事の決断が重要ではないですか？」と発言してきました。しかし、それは委員会内でもなかなか同意を得られませんでした。「愛知県議会で開門調査反対が圧倒的多数なので、知事の決断だけでは動かない」とよく聞きました。ならば県知事選だけでなく、県議会選挙でこの問題を争点化すべきだろうし、選挙以外にもっと争点化する必要があると思います。恐らく市民グループの多くの方は「この委員会は口ばかりで全然動かない」と思っているでしょう。その通りの部分も多いです。しかし、上述のとおり、動かないネックは国だけではない。県民を支配する「公共事業は儲かる」、「環境は強い」、「私には関係ない」といった様々な俗な思いを打ち破っていかない限り、知事も動けないんだらうと思います。もちろん、こういう状況でも知事には「開門調査やるぞ！」という、強いメッセージを出し続けてほしいんですけどね。

環境問題の解決に当たっては、背後から強く活動を支えてくれる圧力団体、業界団体が存在しません。本来、環境省や自治体環境部局がそうであって欲しいのですが、日本ではそのような動きは鈍いです。その点、長良川河口堰最適運用検討委員会は、愛知県という一定の力を有した自治体の中で、環境影響を適切に見ようとする稀有な存在だと、私は思います。だからこそ、最適運用委員会の試みを潰してはなりません。愛知県知事、名古屋市長の個人的な思いにとどめるのではなく、国、地方の公的部門が、そして市民、県民、国民が異なる意見をぶつけ合いながら、開門調査を行うことのできる状況を作り出していかなければなりません。皆さん、引き続き強い意志表明と活動をお願いします。

設楽ダム建設ストップ！の歩みは止めません

設楽ダムの建設中止を求める会事務局長 奥宮 芳子

2022年11月25日第二次設楽ダム住民訴訟の控訴審判決が言渡されました。「棄却」でした。

その日控訴人らは開廷30分前には裁判所前に集まり法廷へと向かったわけですが、「本件控訴をいずれも棄却する」という裁判官の10秒ほどのことばで法廷は終了しました。判決内容は一審の判決を追認するものであって、控訴人の新たな意見はすべて排除されました。この控訴審裁判が即日結審であったことから、おおよそこの判決を推測されていた人は多かったと思います。しかし、この呆気ない判決に怒りは当然ありましたが、意気消沈する控訴人はほとんどいなかったように思われました。私たちは設楽ダム建設事業をストップさせるまでは闘う、とこころにきめております。こんなに国民の暮らしに背を向けた事業に「NO!」を突き付けることをやめ、黙るわけにはいかない、と思っております。終了後開かれた報告会で参加者一同の拍手を持って【上告】を決定しました。私たちは上告します。

1、設楽ダム第二次住民訴訟について

第二次訴訟はフルプラン目標年の2015年が経過し、2017年3月には2015年度の『愛知県の水道 水道年報』が公表され、愛知県需給想定調査の想定した「需要値にならず、かつ、設楽ダムのない既存施設で供給可能なことが確定した事実」を踏まえ、「ダム使用権を返上せよ」との一点で、争われました。建設事業を続けることは税金の無駄遣いになるということが明らかにされたからです。設楽ダムは特定多目的ダムであるため愛知県は事業からの撤退が可能です。

●利水者（愛知県）は

- ・ダム建設事業から撤退をすることができ、特定多目的ダムの場合は、ダム使用権設定申請の取下げを行うことができる（特ダム法施行令1条の2第2項）。
- ・ダム使用権設定予定者がダム使用権設定申請を取り下げたときは、以後の費用負担金の納付義務がなくなるうえ、納付した費用負担金も返還される（特ダム法12条）

●逆に取下げない場合は

- ・地方財政法4条1項（経費の必要かつ最少限度の原則）及び地方自治法2条14項（最少経費による最大効果の原則）の違反となる。

裁判所は、こうした愛知県民の訴えを退けたわけです。

そして「人口減少は認めるとしても水需要の動向としては人口の増減だけではなく商業施設やリゾート開発、産業用地の誘致等による社会経済活動によっても左右される。（一審判決文から）」との理由で設楽ダム建設を「是」としたのでした。昨年5月に国交省が発表した設楽ダム事業の工期延長と事業費の増額は本件とは関係ない一蹴したのでした。

裁判所は社会正義を具現化するところと言われますが、日本の裁判所の実態はこれか、とあきれると同時に恐ろしくもなりました。住民の生活を不当に脅かすこの事業は人権をないがしろにした行為であるし、世界が気候

変動抑制のために SDG s や脱炭素に取り組むいま、これらの動きに逆行し従来の土建国家に追随した判決を受け入れるわけにはいきません。

2、愛知県の設楽ダム事業への対応について

設楽ダム事業の基本計画は以下の表の通り工期延長と工費増額が繰り返されています

1973 年 11 月		建設計画提示に伴い愛知県が設楽町と議会へ協力要請
2008 年 10 月	基本計画公示	事業費 2070 億円 工期 2020 年度
2016 年 9 月	基本計画変更	事業費 2,400 億円 工期 2026 年度
2022 年 5 月	基本計画変更	事業費 3,200 億円 工期 2034 年度

- ①水は足りている。それなのに愛知県民は総事業費の 3 割を負担する。
- ②2035 年 3 月にダムが完成してもそのときは既に、設楽ダム使用権 は必要が無いものとなっている。
- ③地質については、当初から当会ではこれまで何回となく深層崩壊の恐れがある脆弱な地質であることを国と県には訴えてきた。脆弱な地盤に巨大ダムを建設すれば、巨大な災害リスクを負うことになるばかりか、今後も漏水や地滑り対策に伴い、見積もりを大幅に超える費用負担になることは目に見えている。

以上 3 点を踏まえて、昨年 6 月当会は「健康と環境を守れ!愛知の住民いっせい行動」を通して『設楽ダム建設事業からの撤退を求める要請書』を提出しました。これに対する愛知県の回答は「**ダム建設予定地の地盤について、国土交通省からはダムの建設が可能なものである」と聞いており、断層についても「ダム堤体設計に支障となるものはない」と聞いています**、でした。

この愛知県の対応からは国の言いなりで全く自ら調査し県民の命を守ろうとする姿勢を読み取ることはできません。

3、設楽ダム建設ストップの歩みを止めることはできない

設楽ダム第一次訴訟（敗訴）を提訴したのは 2007 年でした。設楽ダム建設中止を求める歩みは 15 年を超えて続きます。第一次訴訟では設楽ダム建設事業が、環境影響評価法が施行された後の初めての大型ダム計画であって、この設楽ダムの環境影響評価のあり方が今後の環境影響評価のあり方においても先例的な意義を持つことも含め利水、治水、環境の面から問題提起し闘いました。ところが自然環境について、国は寒狭川（豊川上流）に棲息する絶滅危惧種ネコギギも移植で保全ができるという見解でした。環境評価について愛知県弁護士会が「市民から出されていた代替案（ダム無し案）については全く検討事項となっておらず、調査地域もダムサイト周辺のみであり、しかも新たな環境調査はしないとしており、これでは最初から環境アセスメントの結果が決まっていると言っているようなものです。（ホームページから）」と問題提起するほどの酷いものでした。

いま、現愛知県知事が設楽ダム事業からの撤退は行わない、国に追随するということが明らかな以上、これまで述べたような危険な事業を私たち県民はストップさせる歩みを続けるしかない、と考えます。

ところで、この事業をストップさせる方法は裁判だけではありません。2 月 5 日には愛知県知事選挙がありますが、私たちには投票権が付与されているわけですから、莫大な税金の無駄遣いと県民のいのちを守る行動を起こさず、気候危機に向き合おうとしない大村知事に、**設楽ダム建設は NO!** を突き付けることはできます。そして、必ず設楽ダム事業からの撤退を公約にかかげ闘う候補はいるはずですからその人に託そう。いま県民の手にボールは渡されています。ぜひ観客席からグラウンドに降りてともに闘いましょう。



長良川・伊勢湾をめぐる新聞「論調」に危惧

長良川市民学習会 堀敏弘

2023年の年が明けた1月7日（土）に「海 きれい過ぎて不漁」という記事が中日新聞のトップにありました。生活や産業の排水規制や下水処理技術の進歩で伊勢湾や三河湾で海水内のリン、窒素が減少して海苔の色落ちやアサリの激減の原因になっているとの内容でした。

しかし読んでいて疑問に思いました。本当にそれだけが原因なのか？

1995年以降だけでも伊勢湾に注ぐ川には長良川に河口堰ができ、揖斐川の上流には馬鹿でかい徳山ダムが造られ、長良川には追加で内ヶ谷ダムが建設中です。三河湾では豊川に設楽ダムが造られようとしています。それに加え国土強靱化の掛け声の下、何年も山や川は工事だらけの状況です。

当然、それぞれの川の上流や山の環境変化は大きく、流れが注ぐ海にも大きな影響がある事は考えられます。こうした公共事業が海に与える影響を研究・検証することなく、排水規制や下水処理技術の進歩だけに結論を求める新聞の論調に危惧を感じます。



2021年(令和3年)12月30日(木)

産卵に遅れ？

地球温暖化の影響で、岐阜県を流れる長良川のアユの産卵時期が遅くなった可能性があることが、岐阜大と県の調査で分かった。温暖化に伴う「水温上昇」や豪雨による「増水」が、アユの生態や産卵のタイミングをずらす「落ちアユ」の時期と深く関係していると判明。産卵が遅れれば、稚魚が翌年に遡上する時期も遅れ、成長するアユが減る恐れがある。漁業者も近年、落ちアユの時期が遅くなっていると感じており、漁への影響を心配している。

(安福晋一郎)

アユ漁温暖化で異変

影響を調べる大規模な調査は長良川では初めて。岐阜大と県が設置した「県気候変動適応センター」が2021年度に取り組んでおり、今年11月に〇年度分をまとめた。岐阜大の永山滋也特任助教(河川生態学)によると、一日の平均水温は一八度を

とみられる。異変が和らぎ、増水が落ち着いた九月以降は、中上流全域に散らばった。上流にいたアユが産卵のため一気には下り始めたのは、十月下旬。通常の雨で水かさが増した翌日で、

もう1つ、1月7日の記事を読んで思い出したのが、2021年12月30日（木）に中日新聞に掲載された「アユ漁温暖化で異変」という記事です。

「温暖化で長良川の水温が上昇し、落ち鮎として川を下る時期が遅れ同時に産卵時期も遅くなり、それにつれて翌年の遡上も遅れ成長するアユが減る可能性がある」とありました。

しかしこれも本当に温暖化が主な原因でしょうか？

確かに温暖化が進めばすべての生き物が何らかの影響を受けるのは事実でしょう。でも長良川のアユについては、異変は1995年に河口堰が運用され始め、河口が閉じられてから約28年ずっと続いているのです。

この記事の中にある長良川の図には河口堰の記載が無く、河口堰ができる前のように秋に産卵しふ化した仔アユが川を下って海まで降下するのを前提として記事が書かれています。

しかし実際には、河口堰によって下流部で流れが無くなり、秋にふ化した仔アユは海まで下れず多くが死滅してしまうと考えられていて、岐阜市内で採取した受精卵を河口堰横の人工河川まで車で運んだり、河口堰に人工ふ化装置を設置してふ化させたりして人為的に仔アユを海に降下させ、長良川のアユの遡上をかうじて保っているのです。流れが弱まった長良川では今ブラックバスが勢力を広げ、バス釣り愛好家の人気スポットとなりつつあります。

長良川のアユの異変を考えるなら、まず海と川を分断している河口堰の影響を

考え、開門調査などでどのように変化するのか検証してから次に進むのが順序というものではないでしょうか？これらのことを考慮に入れず「温暖化で異変」と言われても疑問を持つばかりです。

そしてこの2つの記事を読みながら、海の環境変化や長良川のアユの異変の原因に「きれいになり過ぎた」や

「温暖化」が都合良く使われていると感じるとともに、河口堰や最近の生態系・景観保全を無視した河川工事の弊害の「見えない」化の手助けをしているのではないかと危惧しています。

みなさんは、どう思われますか？是非、ご意見をお寄せください。

- * 1月7日の記事でコメントされている鈴木輝明先生も、伊勢湾の水産環境の悪化を一面的に窒素・リン問題としてとらえるのではなく、「干潟・浅場、藻場」やダム・堰による「河川流量の減少」など総合的に問題を考えられています。
- 詳しくは長良川市民学習会ニュース No35「豊饒な伊勢湾・三河湾を取り戻すために」鈴木輝明筆をご覧ください。
- * 下に掲載の愛知県漁業協同組合が愛知県知事に昨年5月6日に提出した「長良川河口堰に関する要請書」もご参照ください。

長良川河口堰に関する要請書

長良川を含む木曾三川河口域は、それらから供給された良質な土砂により干潟・藻場を含む広大な浅場が形成され、豊富な栄養塩類を基礎とした植物プランクトン生産によりシジミ、ハマグリ、アサリ等の二枚貝類や良質なノリの養殖場として全国屈指の優良な漁場となってきた。また本海域はこのような高い生物生産機能のみならず高い水質浄化機能を有し、伊勢湾の海域環境を良好な状態に維持することにも貢献してきた。

しかしながら、ダムや河口堰、高潮防波堤等の建設による海水流動の停滞や河口域および周辺海域の1960年代からの港湾整備、臨海工業地帯の造成、また、最近では中部国際空港等の海面埋立てにより伊勢湾の生物生産機能や水質浄化機能は大きく低下した。その結果、海域における著しい栄養塩類の偏在による「貧栄養化」や「貧酸素化」が顕著に進行し、魚介類は激減し伊勢湾における漁業は窮地に追い込まれている。貧酸素化については底層溶存酸素濃度の環境基準が設定され現在その類型指定作業が進行しており、我々は今後の干潟・浅場、藻場の造成等による水質浄化機能の回復によりその改善を期待している。貧栄養化問題については窒素・リンの類型指定や水質総量削減計画の見直しについて各方面に強く要請している最中であり、当面下水道施設の管理運転の強化による改善を強く要望しており、実施された一部海域ではその効果が確認されている。

しかし、伊勢湾の貧酸素問題や貧栄養問題の改善にはこれら対策のみならず長良川河口堰の運用の改善が避けて通れない課題と考える。長良川河口堰については、建設当初から河川のみならず流入する伊勢湾の海洋生態系およびそれに依存する海面漁業への悪影響が危惧されることから、これらへの影響調査を実施するとともに、影響対応を強く要請してきたところであるが、当該海域の漁業には影響を及ぼさないとされ、海面漁業には何の配慮もされないまま建設し今日まで四半世紀に亘って運用されてきた。しかしこの間、堰による河川水の貯留による海域への栄養塩供給の大幅な低下や堰の上下流域の底質悪化等が進行していると推測され、我々漁業関係者は伊勢湾の貧栄養化や貧酸素化の主要な原因の一つであると推測している。我々の経験でも堰のゲート操作、特に洪水時の全開操作により堰上下流に堆積した大量の堆積物を含む汚濁水が知多半島沿岸のノリ、アサリ漁場に漂着して甚大な影響を与えた事実もある。その際には大量のシジミの死骸が漂着したことから河口堰の影響と強く推測されたため、抗議し対応策を要請したが、何ら科学的調査もされず我々漁業者の推測は否定さ

れ、何の対応策も講じられなかったという不適切な経緯もある。

2010年に名古屋市で開催されたCOP10では、自然と共生する世界を実現する戦略目標を定める「愛知ターゲット」と、2011年から2020年までを国連生物多様性の10年とする決議が採択され、また愛知県では2012年に「長良川河口堰最適運用検討委員会」を設置し開門調査の必要性について現在も協議されている。特に最新の報告書（長良川河口堰の現在の課題と最適運用について、2022.3）には貧栄養化や貧酸素化と河口堰との関連性についても議論がなされ、その検証の必要性が提起されている。

従って、我々漁業者は、現在の堰の運用と伊勢湾の貧酸素化、貧栄養化との関係性について開門調査を含めた科学的な調査と評価を早急に行うとともに、その調査結果に基づき漁業影響を最小化するための今後の適正な運用方法について我々漁業者と説明・協議の場が設けられるよう管理者への働きかけについて強く要請するものである。

令和 4年 5月 6日

愛知県知事 大村 秀章 様

愛知県漁業協同組合連合会
代表理事会長 山下 三千 男

パネル展「よみがえれ長良川 2022」の報告

長良川河口堰閉鎖（1995/7/6）にちなみ、昨年7月9日（土）～13日（水）ぎふメディアコスモスにおいて、パネル展「よみがえれ長良川 2022」を開催しました。

100点を超える写真・パネル・漁具などの展示で市民に強い関心を広げました。約700名の市民が入場。期間中会場内で開催した増田康記さんのミニコンサート、写真家・伊藤孝司さんのお話、長良川漁師・平工顕太郎さんのトークなどの企画も大好評で、388筆の「長良川に寄せる」熱い思いの感想文が寄せられました。

この紙面では、会場の写真と寄せられた感想文から実行委員会事務局がピックアップしたものを紹介し報告します。



【寄せられた感想文から/すべて原文のママ】

- ・今よりももっと自然できれいだったなんて、知らなかったです。そんな自然豊かな場所を取り戻せるなら取り戻したいです。大切に守って子供たちにも自然を残していきたいと思います。
Y（江南市）
- ・今日偶然にこの展示会を知り見させていただきました。大変ショックを受けました。これだけの企画を立ち上げられた事にも驚きましたが、現状を知らせていただけてありがとうございます。運動に関わっておられる皆様方にも感謝申し上げます。



- ・写真がとても良かったです。特に川に飛び込んで遊んでいる写真がよかったな。今は危ないからダメと言われちゃうけど…。キレイな長良川これからも守ってほしいですね！ J
- ・郡上に住んでいたことがあります。川が美しく緑がキレイで、住んでいる人々もとても美しく保たれるということは、社会そのものが美しいということだと思えます。
- ・昔は魚がいっぱいたった長良川でした。今、川へ行っても何もいない。 T（岐阜市）
- ・徳山ダムの水を長良川に流すなど普段知れないことを聞けて良かったです。地元に住んでいても分からないことはたくさんありますね。 A（岐阜市）
- ・揖斐川と長良川の水の汚れの容器の中を見て、長良川の汚れに驚きました。M（岐阜市）
- ・恥ずかしながら今日まで河口堰の問題を知らず、関心を持つことがなかったです。けれど子供と一緒にパネル等で勉強することができて良かったです。メッセージにあった試験的開門で取り戻す一歩を!!

- ・とても良いパネル展です。分かりやすいし――記憶に残したい内容ばかりです。お願いします。パネルの内容を冊子にすることはできませんでしょうか？増田さんのコンサートも参加しやすくいい雰囲気です。こんなコンサートがいっぱい開けるようになるといいですね。 I（関市）



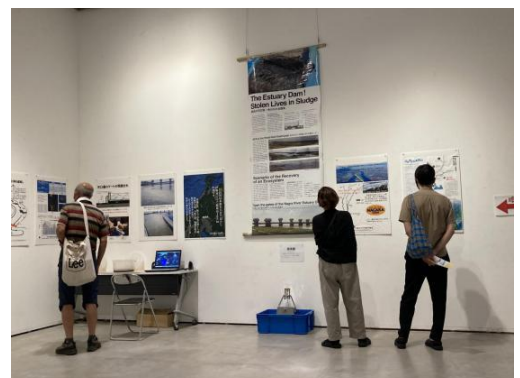


- ・伊藤孝司さんのお話。問題意識の広がりがあるって、良かったです。平工さんのお話、何回目かですが、きょうのは大変良かった。やはり経験を積むことで中身が厚くなる、プレゼンの仕方もうまくなる、両方あると思います。遠方に行くのが難しいという制約があるようですが大都会の人達にきいてもらいたかったです。 Y (大垣市)
- ・みんなできょうりよくしあって一人一人がんばっていて多くのシジミをとれていてみんながきょうりよくしあってほしいとおもいました。 H (各務原市)
- ・これからの世代の生き物たちに豊かな自然を残したい！また人々の手で作られたあやまちを、少しでも直せる様力になれたらと思ってます。 K (郡上市)
- ・初めて運用前の河口堰を見た時、涙が出そうでした。これで川は死んじゃうと思いました。パネル展を見て、実際に人の為にほとんどが役に立っていないことを知りました。ものすごくお金を使って、水資源の利用はあまりなく、おまけに川と共にあった生活は失い、貴重な生物もいなくなり・・・何もいいことはありません。ゲート、開けましょう。河口堰やっぱりいらない。



- ・通路の絵本を見て入りました。岐阜に20年以上住んでいても今まで河口堰についてよく知りませんでした(問題になっていることは知っていましたが)。近年の岐阜市内の治水工事(?) (川岸)を見ていても、生き物の場所が…と気になってながめていました。でも何が正しいかもわからずモンモンと…。少し知りたいです。 O (岐阜市)
- ・人間による自然破壊＝それも一部企業の金もうけの事業としてそれを国がすすめるとは、何とおろかしい、腹立たしいことか。今、地球環境がSOSで気候危機がおきている今、大昔から続いている自然をこわすことはやめたい。まして横越に不自然な遊水地をつくることを絶対止めさせたい。 M (美濃市)
- ・長良川は他県から来る友人が美しいという。川と山全体の調和がすばらしい。しかし、河口ぜきの問題はずっと反対していたが、強こうされた。塩害は証明されていないというのはおどろいた。守りたい、長良川。

- ・長良川河口堰子どもの頃にニュースでよく話題になっていたのは覚えているが、こんなに大切な自然を失わせているものと知り驚いた。見ていてなんかならないものかと胸が傷んだ。 T (岐阜市)
- ・河口堰の事、全く知りませんでした。とてもショックです。使わないモノに何百億も税金を使い、生態系まで破壊してしまうなんて悲しすぎます。もっとたくさんの人が知り河口堰を開いてほしいです。twitter や Instagram などでも発信して若い人たちにも知ってほしいと思いました。 Y (春日井市)



- ・私は郡上八幡で生まれ、吉田川で毎夏をすごし 40 数年前、美濃市に嫁ぎ、長良川と供に生きてきました。私の嫁入りの条件は長良川から離れない所に行くことでした。私は美濃市の中有知地区に住んでいます。2016 年 23 号台風の際は高台の中学校へ避難しました。今、横越河道内に遊水地が出来ると聞き大変不安です。清水と供に生きてきました。今後もこの美しい長良川を守ってってもらいたいです。 H
- ・長良川の大切さを年齢を重ねるごとに感じるようになった。子どもたちに伝えたい。岐阜に住んでいるなら河口堰についてだれでも語れるようにならなくては。
- ・長良川河口堰のことを言葉はきいたことがあったが、どんな影響があるのかなど全く知りませんでした。知ることができてよかったです。
- ・岐阜で育ちましたが、もうすぐスウェーデンへ移住するので、昔の長良川のいい写真を見れたのは感慨深かったです。岐阜の景色を心にきざんで、スウェーデンへ旅立ちます。 S



2022. 7. 12 岐阜新聞



「2023 年展」の構想

よみがえれ長良川実行委員会は、2022 年パネル展と昨年秋のメディコスまつりでの「よみがえれ長良川」ブースでいただいたご意見やご要望に応え、河口堰閉鎖 28 年となる 7 月にパネル展「よみがえれ長良川」2023 の開催を決めました。

テーマ：長良川の「いま・むかし」

開催期間：2023 年 7 月 6 日(木)～7 月 10 日(月)

会場：ぎふメディアコスモス・ギャラリー

- ・長良川のこれまでと現状をみつめ、「長良川をよみがえらせる」道を考えます。
- ・市民参加のパネル展とするため、出展物は幅広い市民から募ります。
- ・議論を広げるために「市民シンポジウム」を開催します。
- ・徳山ダム導水路問題を広く知っていただくために、新しい「リーフレット」を発行します。

幅広い市民の皆さんからたくさんの写真、資料、絵画、文集・詩集などを募集します。
みなさまのご協力をお願いいたします。

メディコス祭りで「ブース」を出展しました

昨年 10 月 10 日に岐阜メディアコスモスで開催されたメディコス祭り（フム、ドキ、ワイワイ）に「よみがえれ長良川実行委員会」も参加しブースの展示をしました。

展示は長良川河口堰問題、木曽川水系導水路計画、内ヶ谷ダム建設問題、美濃市横越遊水地計画についてパネルで現在の状況や問題点を指摘、関心を持ってもらえるように工夫しました。



子ども達にも楽しんでもらえるように長良川やその支流で採取したタナゴ類を中心とした 8 種類ほどの魚たちの水槽も 2 台展示しました。

また、子ども達には見るだけでなく実際に生き物に触れる経験をしてもらえるように、こちらも長良川流域の用水などで採取したドブガイやマツカサガイなど数種類の淡水の貝も用意しました。

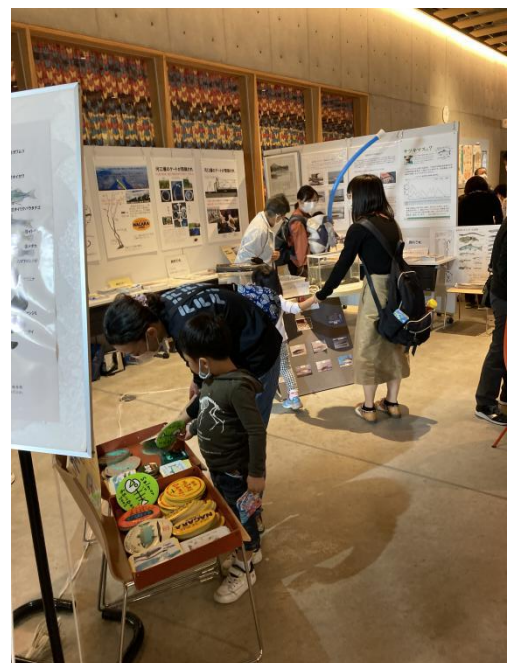
この生き物展示、ブースの場所が館内コンビニ近くとあって通りかかる親子連れの多くを引きつける効果が抜群で、寄ってもらえる親子連れが絶えませんでした。

中にはひと目見て「カネヒラ！（タナゴの 1 種）」と声をあげて日ごろから川で遊んでいるのがわかる子や、一度魚を見て興味を持ち、何度も繰り返し見に来てくれる子もいました。貝も 10 センチ近くもあるドブガイを手にもって感触を楽しんでくれる子もいて、やはり直接生き物に触れることは子ども達にとって魅力的なのがよくわかる光景でした。

「長良川クイズ」をやってもらいステッカーをプレゼントするコーナーも人気で、「長良川の長さ」や「海と川を行き来する魚は？」などの問題の答えを探して展示パネル全体を読んでもらうというこちらの狙いもバッチリ。

「答えはパネルを読んでもいただければ載っていますよ」とか「このあたりを読んでもらえば答えがありますよ」とヒントを出すのですが、ほとんどの方々が、聞いたことはあっても日頃から関心を持っている問題ではないだけに正解を探すのはなかなか難しいようで、途中からはわかりやすいように展示の中の答えの部分にアンダーラインを引く大サービス。

回答をいただいたら好きなステッカーを 1 枚選んでもらうのですが、ここでもステッカーの種類が多く、どれもカワイイデザインだけに 1 枚を選ぶのに悩まれる方がたくさんでした。



このイベントは午前9時頃から午後3時半までという短い時間でしたが、クイズや展示などを通して皆さんと楽しく対話する中で、私たちの運動についていろいろと課題を見つけることもできました。

子供を含んでるとはいえ 7割以上の市民が「徳山ダム導水路計画」を知らない！

これからよりいっそう楽しみながら長良川の現実を知っていただき、かつてのような豊かな長良川を「よみがえらせる」ことに力となってもらえるよう工夫していききたいと思います。

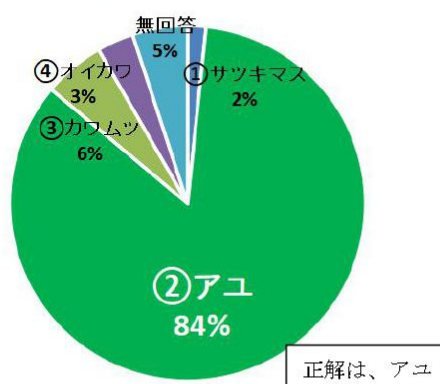
2022/10/10 「クイズ長良川」の回答結果

回答者数 181 名

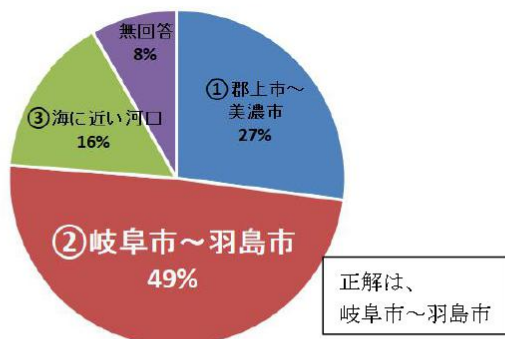
Q1 長良川は、源流から河口まで何kmでしょう？



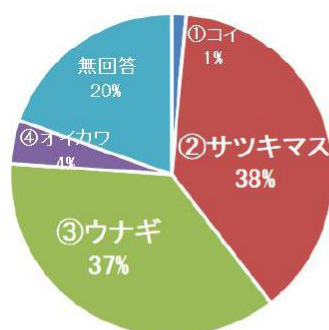
Q2 長良川によく見られる魚です。アユはどれでしょう？



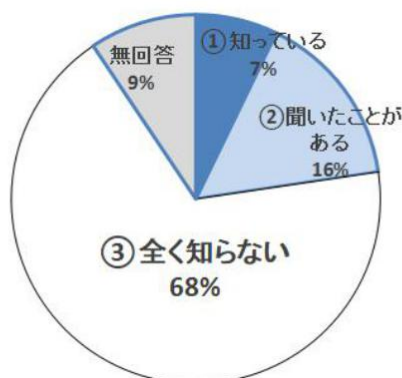
Q3 長良川のアユはどのあたりで産卵するのでしょうか？



Q4 海と川を行き来する魚はどれでしょう？



Q5 あなたは、徳山ダムの水を長良川に流す「導水路」の計画を知っていますか？



Q4の正解は、「サツキマスとウナギ」です。

両方ともを選んだのは、29%の人でした。択一問題と勘違いして一つだけ選んだ人も多いようでした。設問の仕方が良くなかったかもしれませんね。

約7割の人が、導水路を「全く知らない」とは、ちょっと残念！
もっと宣伝活動が必要ですね。

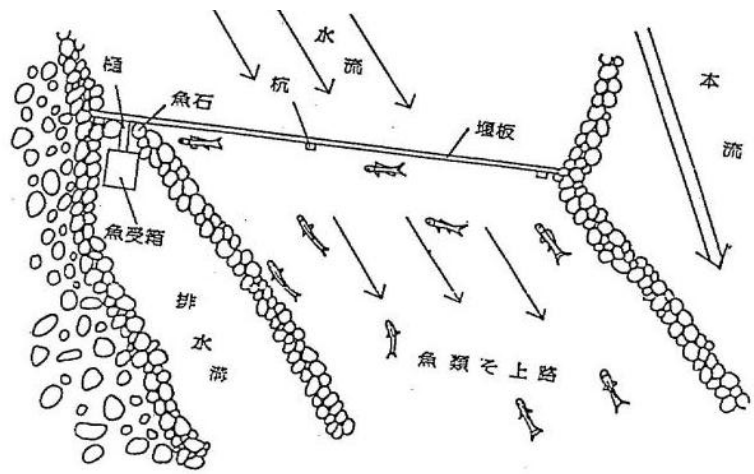
長良川の魚をこよなく愛した宮子さん

長良川市民学習会 田中万寿

長良川市民学習会は、河口堰が閉鎖されて 20 年たった 2015 年に、魚たちが以前のように自由に海と川を行き来できることを願って、後藤宮子さんが描かれたアユ、サツキマス、ウナギ、ヨシノボリなど9種類の回遊魚を元にステッカーを作成しました（次ページ参照）。出来上がったステッカーをお届けした後は、コロナもありお会いできないままでした。2018 年 10 月に 93 歳で亡くなられたことを知らせてくださったのは関高校時代の教え子で、調査などの 協力をされていた村瀬文好さんでした。



長良川での観察会で 1989/8/12



登り落ちの仕組み

浅瀬を遡ってきた魚は堰板に遮られる一板に沿って横に移動し魚石(うおいし)に到達する一魚石に登り堰板を越えようとする一勢いよく落下する水に流され魚受箱に捉えられる。

宮子さんは1925 年に揖斐川上流の旧本巣郡根尾村で生まれ、東京の帝国女子理学専門学校(現東邦大学理学部)を卒業し、岐阜県の高校の理科の教員になりました。専門学校時代には植物を中心に学び、「牧野富太郎さんにも習ったことがあるのよ」と伺ったことがあります。牧野さんの植物画と同じように、宮子さんの描かれた絵は、特徴をきちんと捉えた中にも、魚たちへの愛が感じられる暖かい生物画だと思います。

生物教育研究会の一員として長良川の魚の調査を担当することになり、夫の正さんと関市の自宅近くを流れる長良川の分流・今川で「登り落ち漁法」で調査を始めたのは 1967 年でした。以来 1997 年まで 30 年間、途中少し途切れることはあったものの、毎日朝夕2回、調査を続けられました。仕掛けを造り採るのは正さん、宮子さんはその魚を分類し数を数え記録されました。1 回平均 2~300 匹。数えるだけでも大変な作業だったでしょう。お宅にはホルマリン液を入れたインスタントコーヒーな



保存用にホルマリンに入れた魚

どの瓶が所狭しと保管されていました。それらの瓶は近所の人たちが持ち寄ってくださったとか。二人の子供さんを抱え、女性には少ない理科系の教師をしながらの調査で大変なことだったと思います。調査されていた時代には長良川には大きな変化がありました。70年前後には工場排水により魚が激減、80年代後半には河口で堰建設が始まり1995年にはゲートが締め切られました。膨大な魚たちと観察ノートは、天候、水質、流域の変化などを知るための貴重な資料です。後藤夫妻のおかげで、現在私たちは、当時長良川にどんな魚がどれ位いたかを知ることができます。

2007年にサツキマスやアマゴなど47種、126万点の標本と記録などが滋賀県立琵琶湖博物館に寄贈され整理されています。(琵琶湖博物館 <https://www.biwahaku.jp>)

宮子さんが採集された魚で一番多かったのはヨシノボリでした。「この小さなヨシノボリたちは海からここまで何十キロも川底をのぼってきたのよね。幅30cm、長さ40mの私たちの登り落ちの小さな堰さえ飛び越えられないのよ。どうしてあんなに大きな河口堰に登ることができるの?」宮子さんの言葉を思い出しています。

宮子先生と私

関市 村瀬 文好

私は昭和39年(1964)に岐阜県立関高校に入学しました。宮子先生は一年生の時の担任でした。授業ではほとんど脱線などしない真面目なきちんとした先生だったという印象です。私は植物や生き物が好きでしたが、生物部では犬や猫まで解剖をする!と聞いてちょっと腰が引け、美術部に入りました。でも根尾川や長良川上流であった野外調査にはなぜか参加していました。いろんな部の生徒も参加できる自由な雰囲気がありました。

十数年後のある日偶然、名鉄美濃町線(今は廃線)でお会いし、魚のことなどお話ししました。当時先生は関市の自然調査をしておられたようで「よかったら参加してみない」と誘っていただきました。私は自営業で時間を融通できましたので参加することにしました。以来、車を運転できない先生の運転手兼助手のような形で、「登り落ち」以外の色々な調査で一緒しました。アジメドジョウの研究では共著者として記載していただいたこともあります。長い間、貴重な楽しい経験をたくさんさせてもらえ、本当にありがたかったという思いでいっぱいです。

インターネットで、「後藤宮子」と検索すると村瀬さんとの共著の「アジメドジョウの生態研究」

<https://www.takara.co.jp/environment/fund/pdfs/h02report01.pdf>

や「ぎふ文化」でのインタビュー記事などが読めます。この記事の中に「登り落ち」の図、標本、写真など興味深いものがいっぱいあります。是非ご覧ください。

よみがえれ長良川実行委員会作成 ステッカーのご案内

かつて長良川と海を自由に行き来していた回遊魚のうち代表的な9種類の魚を2枚のステッカーにデザインしました。ステッカーの原画は、後藤宮子さんが描かれ、デザインは高橋由実さんにお願しました。

みなさん!このステッカーを使って、「よみがえれ長良川」の声を広めてください。

- 価格 リーフに挟み**2枚1組 200円**(送料別)
ステッカー(タテ8.8×ヨコ13.4cm)
- ご注文は、mutohitoshi@yahoo.co.jp
または、090-1284-1298(武藤)



後藤宮子さんと私

川那部 浩哉

後藤宮子さんにお目にかかった最初がいつだったのか、いま手元に手帳がないので確かめられないのだが、おそらく1970年9月19日に、岐阜県高校生物研究会に招いて下さったのが、その最初だったかと記憶する。そして翌年に、京都大学の動物生態学研究室へ、高校の先生として内地留学されることになった。後藤さんは、お連れ合いの正さんとともに、生きもの全般についていろいろ調べることの好きな方だった。とくに植物にはたいへん詳しく、京都でも何度も教えて頂いたことがある。

その夏には、島根県の江川の調査にも参加し、アユなどの魚や水生昆虫の観察・採集をされた。この川の上流には、ゴギというイワナの仲間がいるのだが、長良川や飛騨川に棲むヤマトイワナやニッコウイワナとは異なって、頭頂部にまで白斑のあるのに気付かれた。そして、分布域が狭まり、個体数も少なくなっている状態を憂いて、地元の方にもいろいろ尋ねておられたと記憶する。魚にも詳しいし、自然保護にも大きい関心があるのだなど、改めて知ったものだ。なお、このときの調査結果の一部は、「江川西部におけるゴギの分布」として、イワナやヤマメの研究者の丸山隆さんと3人の連名で、報告書『江川水系の生物生態2』に載っている。そうして、1年間の公式の内地留学期間が終わってからも、動物学教室の研修員として、かなり永らく在籍し、毎週月曜日に開かれていた生態学談話会（公式のゼミナールにあたる）には、いつも出席して下さっていたものである。

しかし、やはり何よりも特筆すべきは、後藤さん夫妻が、1967年に長良川のご自宅の近くに＜登落ち＞を設置し、遡上する魚の継続調査を進められた、まことに素晴らしいお仕事だ。お目にかかった時点で、もう3年ほどが経過していたわけだが、言葉どおり「雨の日も風の日も」、毎朝・毎夕の継続したご努力には、そのときもすでに感激したものである。私は、京都府北端にある宇川へ1955年以来、海外へ出ていた1年だけを除いて、毎年欠かさず通って、アユなどを中心に調査を続けていて、継続調査の必要性を強く感じていたのだが、後藤さんの調査はまさに毎日なのだ。種別・体長別の採集数の克明な記録は、気象はもちろん、水温・水量や他の生きものについての情報、いわば＜川象＞とともに記載され、まことに見事なものだった。このお仕事の一部は、1971年に『日本生態学会誌』にも載っているが、この毎朝・毎夕の継続調査は、それ以後25年以上もずっと続き、さらにその毎日の採集品の一部は、ずっとお宅に保管されていたのである。

正直に言って、その膨大な資料を詳しく解析するのには、かなり手こずっておられたようだ。田中豊穂さんの助力も借りたりされたようだが、その全面的な解析はまだ残ったままの筈だ。しかしその標本は、1993年に自宅の横に建てられた「白銀登落荘」に、安全に保管された。＜しろがね＞はお宅の住所の＜関市下白金＞に因んだものだが、『萬葉集』や『竹取物語』にも出てくる由緒正しい名まえである。その後1995年ごろになって、琵琶湖博物館の学芸員が整理をお手伝いし、その標本は現在、一部は岐阜県立博物館に保管され、一部は琵琶湖博物館で今なお、整理中と聞く。

後藤さんは、高校で習った岐阜県の生徒さんはもとより、ずっと若かった京大動物生態学研究室の大学院生にも、大いに慕われた。また、地元はもとより、いろいろなところでさまざまな問題に関わられたこと、とくに、自然保護全般や長良川河口堰問題に関するそのご努力は、多くの人が知っていることだろう。多くの雑誌や各種グループの機関紙にも寄稿され、その画かれた作品もたくさん載っていて、少なくともその一部は今も臉に浮かぶところだ。

ご自宅などには何度か伺ったが、施設に移られてからは、お招きを頂きながら伺う機会を失っており、201

8年にお亡くなりになったことも、田中さんからの御連絡で初めて知った状態だ。直接に知っている者の心に強く刻まれているだけではなく、絵や文や資料や標本を通じて、後藤宮子さんのお名まえは、正さんとともに、畏敬の念をもって、ずっと知られ続けていくことだろう。

(かわなべ ひろや)

京都大学名誉教授、滋賀県立琵琶湖博物館初代館長、元日本自然保護協会・河川問題調査特別委員会委員長

追悼

須田道康さん NPO法人「ギンブナの会」元事務局長



2005年に後藤宮子さんが中心になって立ち上げられた「ギンブナの会」の事務局長を務めた須田道康さんが昨年亡くなりました。

7, 8年程前、奥さんが亡くなられ、その後まもなく脳梗塞を患われてとても気を落とされていました。しかし、長良川市民学習会の定例会議にも再び度々出席されるようになり私たちは喜んでいました。

コロナ禍で環境団体のイベントが次々無くなる中、3年前の秋「環境観察会を企画しました！」と元気なメールが須田さんから入りました。さっそく参加させていただきましたが、関市内の農業用水門の締め切りにあわせた企画で、地域の家族連れ50人を超えるたくさんの参加者に驚きました。魚すくいに夢中の子供たちと水辺の彼岸花に囲まれた須田さんの姿が臉に

強く残っています（上の写真）。私にとってはこれが彼との最後となってしまいました。

須田さんが長良川市民学習会にいつ頃から参加されたのか覚えていませんが、会議ではいつも熱く語られ、ぐいぐいと人を引き付ける迫力を持ってみえました。とくに2010年10月の『今川の「小さな命」救出作戦』では地元住民や行政を動かした須田さんの底力には圧倒されました（詳しくは当会ニュース10号）。また、須田さんが一貫して主張されていたのは「長良川中流域の遊水地の重要性」です。当会は関地域に残る伝統的治水現場の案内やレクチャーもしていただきました。当会ニュース31号（2020年2月14日）には『こうやって「遊水地」が消えていくのですね』を寄稿していただきました。もっともっと教えていただきたいことがありました。

須田さんといえば必ず奥さんが笑顔で同伴されていたのが印象的です。人も羨むお二人でした。突然の最期は無念だったでしょうが、きっと向こうでまた仲睦まじくされていることでしょう。（武藤 仁）

事務局より

■ 長崎県の石木ダム。結構早い段階から土地の一部を譲って頂いて「地権者」となっている。事業認定に対する審査請求、事業認定取消訴訟、工事差止訴訟などに名を連ね続けてきた。長崎県収用委員会による収用裁決・明渡裁決に対しても審査請求を行っている。

審査請求を行うと口頭意見陳述の機会がある。30分ばかりの陳述のために複数の指定候補日から選んで国交省本省か長崎に行くのは負担ではある。とはいえ権利放棄したくないので、国交省本省で口頭意見陳述を選択し、

昨年 12 月 1 日に東京に赴いた。担当部署の「土地収用管理室」のお役人は丁寧で親切である。現に人が暮らしている家屋を行政代執行で破壊するとなれば、長崎県の蛮行は、日本国内以上に国際的に響き渡ることになるだろう。日本の「公共事業」の在り方そのものが国際的な批判を浴びるかもしれない。「土地収用管理室」が丁寧・親切に対応するのは、国際的な「眼」を気にして、起業者長崎県に”目配せ・合図“を送っていると考えるのは穿ちすぎだろうか。

「不要、デメリットばかり」の石木ダムである。一刻も早く中止の決断をしてほしい。 (近藤ゆり子)

■ 政治はより多くの生活を良くする為の方法であり道具です。

生活の多くは女性が担っています。20 年後に生きているかわからない人達が将来を決めています。

キッチンと「国民の生命と財産」は守られるのかなあ？

議場では少なくとも女性が半分は必要。男はこれから長く生きる 50 歳までが決めるべきです。

2023 年、コロナ 4 年目 こんな夢で目が覚めました。 (粕谷豊樹)

■ 2022 年の猛暑の夏、名古屋市瑞穂保健所主催、水辺研究会の國村さん、松村さんが講師をされた親子水辺教室を見学しました。山崎川は東山公園近くの池を水源として名古屋港に注ぐ総延長 13.5 キロの両面コンクリートで覆われた掘割水路ですが会場の瑞穂運動公園あたりは近自然工法が施され、草が生えた水辺に近づく親水公園になっています。事前に先生から説明を聞き、子供たちはタモを手で膝までくらの川に入り、めいめい獲った魚を水槽に持ち寄り、先生から名前や説明を受けます。「すごいね！スッポンだよ。」子供はびっくりし大喜び。30 分ほどでなんと 20 種類ほどの生き物が集まり、大型の水槽はいっぱいになりました。小さいながら絶滅危惧種のアユカケ、ウナギなどの回遊魚も！アユやモクズガニがとれたこともあったとか。海と繋がっていればこんな貴重な魚たちがちゃんとやってくるのだ、と子供たちと共に驚き感動した観察会でした。



(田中万寿)

■ 昨年、メディアコスモスで開催した「よみがえれ長良川」のパネル展でのアンケートに沢山の感想やら、ご意見を頂き有り難うございました。その中で幾つかを、News 今号で紹介し、今私たちが考えなければならない事をハッキリさせよう！と、及ばずながら私がまず選ばせてもらいました。

選択する中で、①自分も出来ることがあればやりたい。②河口堰は長良川にとって無益だ。③横越に作られる遊水池は危険だ。④未来に、子供たちに貴重な自然を残したい。この 4 点の思いを中心に選びました。

主体的に運動を考え、自分も参加する。この気持ちは今後の事を考えると、方法など運動の仕方として最重要です。未来に繋がる思いを大切にする。今直面する遊水池は、国や県の未来に対する姿勢が分かり、何としても直ぐやめさせたい。そして、河口堰！堰完成以来、海から一本で繋がる川ではなくなって、長良川はどんどん弱っています。蟹のこと、葭原のこと、生き物である私たち人間のこと、問題は山積。一緒に頑張りましょう！

(岡久米子)



参加団体紹介 15

「よみがえれ長良川」実行委員会の参加 30 団体を紹介しています。
第 15 回は「水源連」さんです。

河口堰の開門調査を！ 設楽ダム建設中止を！

水源開発問題全国連絡会 遠藤保男

水源連（水源開発問題全国連絡会）は 1993 年発足以来、全国各地のダム立地に悲鳴をあげている皆さんと共に、無駄なダム事業計画中止に取り組んできました。

水源連結の趣旨は下記の三点です。

1. 互いの情報連絡を密に行って、水源開発事業者と闘うための戦術、戦法を練る
2. 水源開発事業の欺瞞性を大きくアピールして、世論を喚起する
3. 力を結集して、国土交通省などと交渉し、水源開発計画の見直し、中止を求める

この趣旨にもとづいて、会員間の情報の伝達・交換を行っているほか、国土交通省等との交渉、国会議員との連携活動、公共事業に関するシンポジウムの開催、河川整備基本方針に係る委員会への取り組み、河川法改正に関する取り組み、各ダム反対運動団体への支援などを行っています。これらの事業計画は実は不要・無駄な事業であって、事業地の地域社会と貴重な自然体系を破壊し、不要・無駄な事業のために遣われる事業費の返済義務が受益予定者とされている人だけでなく次世代の方々にまで課せられる不条理を広く知らせることに努めてきました。

長良川河口堰建設事業、徳山ダム建設事業、設楽ダム建設事業など、影響を受ける流域の皆さんと支援者の闘いに連帯し、水源連仲間同士が連絡を取り合い、現地視察・現地行動、地方建設局への中止要請、さらには住民訴訟をはじめとした裁判闘争の支援などに取り組んできた経緯があります。

長良川河口堰建設事業中止を求める運動等は、1997 年「河川整備計画の案を作成しようとする場合、公聴会の開催等関係住民の意見を反映させるために必要な措置を講じなければならない。」を盛り込んだ河川法改定を勝ち取りました。しかし、その運用は時を経るにつれ形骸化し、起業者側は「公聴会」「パブコメ」を行うものの、異論反論はまったく無視、聞置くだけ、という実態が続いています。

「川のあり方は流域住民が決める！」その実現を皆さんと共に今年も目指します。よろしくお願いいたします。

水源連ホームページ <https://suigenren.jp/>

「自然の権利」基金

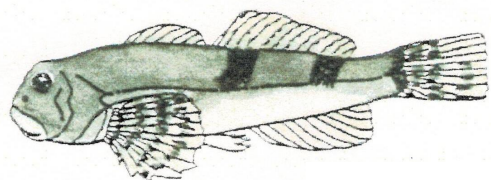


ニュース 37 号（前号）の「よみがえれ長良川」参加団体で紹介しました「自然の権利」基金の振り込み用紙を同封いたします。趣旨に賛同の皆様のご協力をお願いいたします。

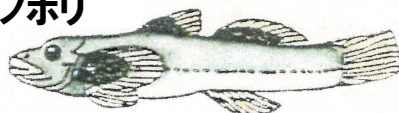
また私たち「長良川市民学習会」の振り込み用紙もお送りしています。私たちは会員制ではありません。お気持ちのある時にお使いくだされば幸いです。

長良川にすんでいる魚たち

カジカ



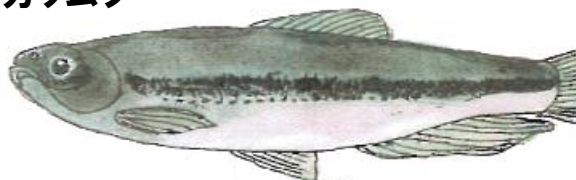
オオヨシノボリ



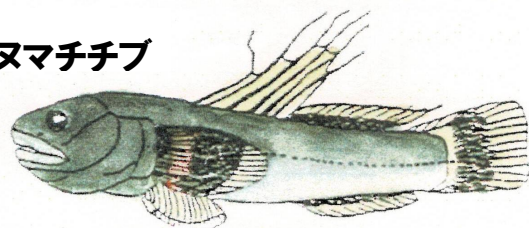
シマヨシノボリ



カワムツ



ヌマチチブ



ウキゴリ



オイカワ



カマツカ



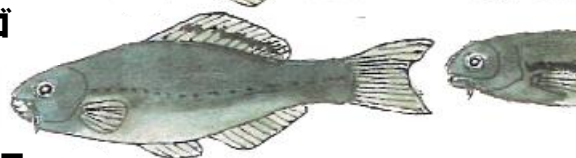
長良川支流に すんでいる貝類

カワニナ



ヤリタナゴ

アブラボテ



マシジミ



ドジョウ



ヒメタニシ



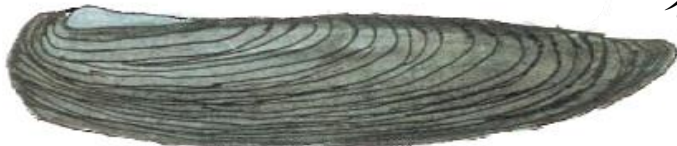
マツカサガイ



イシガイ



トンガリササノハガイ



絵：長良川市民学習会は、後藤宮子さんの許可を得て印刷物にしています。

発行：長良川市民学習会 <http://dousui.org/>

代表：粕谷志郎

連絡先：武藤 仁／090-1284-1298

〒500-8211 岐阜市日野東 7-11-1

mutohitoshi@yahoo.co.jp



私たちの活動は皆様のカンパで成り立っています。
賛同してくださる方は、ぜひカンパをお願いします。

ゆうちょ銀行口座：00840-3-158403

口座名称：長良川市民学習会